



ジュール・パスキン《再び放蕩息子》1927年

は下着姿のようである。もう一人は服を着ている。彼女たちを描写する線は固いはっきりとした線ではなく大変おぼろげに描かれていて、ほつれた糸のように見える。そのため、二人の少女は背景の空間の中に溶けこんでゆくようにも見える。それは、彼女たちに施された絵具の塗り方と背景の塗り方が同じであることにもよるのだろう。そこで、背景に目を移してみると、淡い色調で、さまざまに変化する色彩による何かふんわりと、優しい空間が作り出されていることがわかる。空間は少女たちを包み込み、画面全体を夢の中のような雰囲気になっている。二人の少女を包み込む、淡く繊細で優しい空間は、パスキンのほかの作品の中にも見られる空間である。このような表現は一体どこから生まれてくるのだろうか。

《再び放蕩息子》という版画作品を見てみよう。聖書の中にある放蕩息子のお話を描いたものだが、パスキンはそのお話を彼独特のものに作り変えている。ここでは放浪の旅から帰ってきた放蕩息子が、沢山の女性たちに迎えられる。レンブラントの絵にあるように父親を迎えられて抱かれるのではなく、女性たちに迎えられるところが、パスキン一流のアイロニーといえるだろう。ここで放蕩息子は永遠に放蕩を繰り返すことになるのでは



グスタフ・クリムト《哲学》1899-1907年

ないかという危惧も抱かせる。放蕩息子のテーマはパスキンにとって特別なテーマであつたらしく、油彩や素描などでも繰り返し描かれた。ここでは、空間を斜めに占めるように描かれた女性たち、そして湾曲した線によって表現された背景によって、動きのある画面が作り出されている。そのような空間の歪みは、放蕩息子の不安定な心情を象徴するようでもある。固定された空間ではなく、遠近の定まらない不安定な空間である。

西洋近代の美術においては、遠近法にのっとり空間とは異なった空間表現が試みられる。空間を解体した代表といえるのがピカソで、三次元の空間を二次元の空間に描きこむことによって、固定された遠近感を完全に解体してしまった。ピカソとは異なった表現ではあるが、例えばクリムトの空間の中にも、そういっ

た方向性を見ることが可能である。クリムトが描いた《哲学》と言う作品では、流動的で方向性の拡散した空間が描かれる。パスキンも同時代に生きた画家として、やはり同じような空間への志向をもっていたといえるだろう。パスキンは、この時代の絵画の動向の中で、ピカソやクリムトと同じような志向を持ちながら、しかも自分らしい表現を見つけたといえる。

このような空間は、私たちの心の中や、目に見えない神秘的なもの、人知を超えた力などといった、論理的には説明しがたいものを表現しているように思う。この時代の画家たちの一部は、そういったものを表そうとしているようである。それは、この世の中が必ずしも論理的に説明できるものばかりではないということに気付いた時代の志向性を表しているとも思われるのだが、パスキンの作品の中にも、そういった、論理を超えたものを感じ取ることができる。

パスキンという多面体

最後に、パスキンとは一体どんな人物であったのか、考えてみたいと思う。パスキンについて書かれた文献に次のようなものがある。

1976年3月、パリ市立近代美術館で開かれた「パスキン展」の紹介記事の中で、ジャンヌ・ワルノーは父アンドレ・ワルノーの友人であったパスキンの印象を書いている。「彼のおぞおぞした振る舞い、ためらいがちな言葉、優しく情愛がこもっているが、時々鋭くなる眼差しは、わたしを不安にした。父は彼のことを天使でもあり悪魔でもあるといっていた」(「パスキン：芸術-祝祭と死」ル・フィガロ紙) 浅川 泰「エコール・パリの異邦人 パスキンを中心に」カタログp.70

・・・話題はシュールレアリスムだった。パバゾフはパウル・クレーを筆頭にあげ、ペール・クログはキリコ、ダルドはナイーブ派の税官吏ルソーこそが第一人者だと言ってゆずらない。

アンドレ・サルモンとアンドレ・ワルノーは熱心に聞いていたが、何も言わなかった。それからドラグが、フランスの写実主義はどうかと話をふったが、芸術についてとやかく言うことがあまり好きでないパスキンが大声を出した。「主義、主義って、どうでもいいじゃないか。目の前にふるいつきたくなるようなモデルがいるってことが人生、つまり芸術そのものだろう。小難しい話はマティスにやらせとけよ。あいつの絵はでたらめの東洋趣味だけだな」(ギィ・クローグ「さよなら、リュシー」)

武田 厚編「パスキン」p.192

これらの文献にも表れているように、パスキンは、非常に多様な面を持った人物だったと考えられる。彼のパリでの生活は、「パスキンの饗宴」と呼ばれる夜毎の乱痴気パーティーに明け暮れるものだった。街中やアトリエで、多くの人々とともに朝まで騒いだ後、パスキンはいつも、そのお祭り騒ぎの後に訪れる静寂を味わい、虚しい想いに襲われていた。沢山のひとと交わり、快活に振舞いはしたが、一方では大変繊細で孤独な人物であった。また、放浪癖のあったパスキンは多くの土地を旅した。自由を愛し、旅先でも、パリにあっても、拘束されることを何よりも嫌ったという。時には、皮肉屋としての一面も覗かせたが、弱者を慈しむという点で非常に優しい面もある人物だった。

パスキンの作品の中には、このような複雑にして繊細な人物像がそのまま映し出されているように感じられる。クララとジュヌヴィエーヴは、パリの社会の底辺に生きる娼婦たちであったかもしれない。パスキンは彼女らに慈しみの眼差しを向け、細やかな愛情を込めて、描き出している。《クララとジュヌヴィエーヴ》の優しい空間は、パスキンという人物の反映であり、彼の中にあつた様々な感情を内に秘めながら、「真珠母」のように多彩な光を放っている。(AN) *参考文献：武田厚編「パスキン」(岩崎美術社、1995年)

展覧会の舞台裏

広報 1

近年あらゆる分野において広報の重要性が強く叫ばれています。以前、『戦争広告代理店』という本を、大変面白くかつ驚いて読んだことがあります。ボスニア紛争の際に、アメリカのPR企業がボスニア側の要請を受けて地球規模の世論操作を行い、セルビアを悪役に仕立て上げ国際的に孤立させ、有利な停戦条件を勝ち取るまでの裏側を描いたものでした。ハンバーガーや自動車などの商品販売であればともかく、国際紛争のような重大かつ政治的な案件にまでPR企業が関わっていることに驚き、その巧妙な世論操作によって真実や正義など、どうとでも解釈しようという事実には震撼としました。考えてみれば、ハンバーガーや自動車の良し悪しを見分けるよりも、国際政治の真実や正義を判断の方が何百倍も難しいわけで、その分広報の果たす役割が大きくなります。利に敏い企業がそこに目を付けられないはずがありません。「正義は必ず勝つ」などとのんびり構えていられるほど国際政治は甘くない、という厳しく冷酷な現実がそこには横たわっていることを教えられました。

話がそれてしまいましたが、展覧会においても広報が重要な役割を果たすことは言うまでもありません。どれほどの労力と時間を費やし、画期的で優れた内容の展覧会を実現しても、誰にも見てもらえないのでは努力の甲斐があり

ません。カタログという記録は後々までも残りますが、展覧会の本質はあくまでも本物の作品が生み出す空間の中にこそあります。僅か数か月で消えてしまうその貴重な空間に足を運んでもらうための戦略的な手段、それが広報です。

では展覧会の広報はいつ頃から始まるのか？ これは展覧会の規模や内容によって一概には言えませんが、おおむね数か月前から早いものと1年近く前から広報を展開する、という事もあります。広報をするためには、当然ながら伝えるべき内容が決まっていなければなりません。開催の1年も前に内容が決まっている展覧会があるのか？ 稀ではありますが、ないわけではありません。当館でいえば2011年に開催した「ゴッホ展」がそれにあたります。オランダのゴッホ美術館とクレラー＝ミュラー美術館のコレクションが中心となったこの展覧会は、準備の最初の段階で両館の協力が得られることが確定していましたから、1年前でも主要な出品作品はほぼ決まっていた。一方で、ゴッホのような著名な作家の展覧会には莫大な経費が必要で、それを賄うためには多くの来館者に見てもらふ必要があります。というわけで、必要があり、材料もそろっているという二つの条件が満たされ、ゴッホ展の最初の広報用チラシは、開催の1年近くも前に世の中に出回ることになりました。早過ぎる？ いえいえ。展覧会の内容を十分に周知し、その期待を高めていくにはありません。展覧会の広報は未だに紙を中心とするアナログな媒体が中心ですから。(F)

感想ノートから

「マインドフルネス！ 高橋コレクション展 決定版2014」

2014年4月12日(土)～6月8日(日)

この展覧会では、90年代以降の日本を代表するアーティストたちの代表作が見られるということもあって、現代美術に興味のある方、特に若い年齢層のお客様が多かったようです。みなさまからの感想をご紹介します。「知っている作家の代表作ばかりじゃないですか！何ですかこれは・・・コレクターの人でこんなに重要なものをそろえている人がいるなんて知りませんでした。作家だけでなくコレクターさんに注目して作品を見てみるのもおもしろいかもしれませんね！」確かに個人のコレクションは、コレクターの情熱に加えて、コレクターの個性を感じることができるのも魅力です。高橋コレクションには特に作家さんの初期の代表作が揃っています。それは、まだその作家が広く知られる前に作品を購入されているということ、つまりコレクターの慧眼が表れているということも言えると思います。「とてもとてもどぎもをぬかれました。不思議、不気味、あざやか、どんなことばで表現しているのかわかりませんが、人間の無力さ、限界、そして無限の能力、永遠の未来といった対比を感じる鑑賞でした。」「私の中にも表現したい」という思いがあることに、気づかせていた



いただきました。」「“日本で生きていてあなたが感じているようなことはひとりだけじゃないんだよ”と応援された気分です。非常に魂の底にふれた作品群でした。」「こうじゃないといけない・・・ということはない!!ということがわかった。4年前のトリエンナーレから現代アートにはまっています。現代美術の作品はまさに私たちと同じ今を生きるアーティストたちが生み出したものだからこそ、その自由な発想に驚いたり、共感できることも多いと思います。作品のパワーに私たちの創造力も刺激されますね。」「何百年か後に制服姿で描かれている少女について研究する美術史家が現れるんだろうなと思いました。未来の人たちは、今私たちが生きている時代をどう見るのでしょうか。未来の美術史の中で今の現代美術がどう評価されていくのか、未来に残すという意味もふまえて、今を生きるアートを大切にしていきたいと思いました。(hina)

展覧会 現在進行形

だまし絵Ⅱ

2015年1月10日(土)～3月22日(日)

「だまし絵Ⅱ」は、2009年4～6月に当館で実施した「だまし絵」展の続編です。「だまし絵」展は、16世紀から現代に至るまで、主に遠近法の発達とともに進化・多様化していくだまし絵の歴史と展開をたどる趣旨の展覧会でした。大変好評いただいた展覧会でしたが、アルチンボルド《ルドルフ2世》や、河鍋暁斎《幽霊

図》などの歴史的な名作とともに反響が大きかったのが、パトリック・ヒューズ《水の都》や本城直季《small planet》などの「現代のだまし絵」でした。「だまし絵Ⅱ」は、写真やテレビの普及、コンピューターによる画像操作など、視覚文化がそれ以前とは比べ物にならないほど変化した現代において、現れるべくして現れた「だまし絵の進化形」を紹介するものです。タイトルは「だまし“絵”」となっていますが、実のところ絵画は半分くらいになるかもしれません。一例を挙げましょう。挿図に極端に引き伸ばされた女性の肖像が載っています。二次元上ではもはやこのような画像の編集・加工は簡単に行えますし、さして驚くイメージで

もありませんが、実際これは像高3mの立体作品なのです。作者のエヴァン・ペニーは「ナチュラル・ボーン・キラーズ」などの映画で特殊メイクを担当したことがあり、肌の質感など怖しいほど生々しく再現します。仮想世界のイメージが現実空間に飛び出てきたら・・・展覧会ではその強烈な違和感が味わえるでしょう。「だまし絵Ⅱ」は東京Bunkamuraザ・ミュージアム、兵庫県立美術館、名古屋市美術館を巡ります。東京で8月9日に開幕しますので、それまでにカタログ制作と作品輸送を終えなければなりません。ふつう展覧会に出品される作品というのは3ヶ月前には確定しているものですが、今回はどうしても出品したい作

品があるため、ギリギリまで出品交渉が続いています。この「アートペーパー」の原稿のメ切りが6月15日、「だまし絵Ⅱ」カタログ原稿のメ切りがその翌日ということで、今まさに正念場、時間とのたたかいです。(nori)

エヴァン・ペニー (引き伸ばされた女 #2) 2011年 ©Evan Penny, courtesy Sperone Westwater, New York



郷土の作家たち

丹羽 和子(にわ かずこ/1924-2014)

1924年名古屋市生まれ。1944年、女子美術専門学校洋画部(現・女子美術大学)を卒業。1944~46年の間、名古屋大学医学部病理学教室研究補助員として病理解剖図を描く。1947年、洋画家の加藤金一郎と結婚。1949年、新制作協会展初入選、以後毎年出品。1963年《人と人の対話》が第27回新制作展で新作家賞を受賞。1967年、新制作協会会員推挙。1999年、名古屋市長賞を受賞。

初期の具象的な人物画からキュビズムの影響とおぼしき幾何学的抽象による人物画、シュルレアリスムの傾向の作品、和紙のコラージュを多用した作品等々、刺激を受けたり興味・関心を惹いたりしたものは間をおかず自身の作品に取り入れる柔軟性が特徴の一つと言える。どの時代にも共通して作品に登場するのは人物像で、実在の女性や可愛らしい童女を水彩や素描で描く一方、新制作展への出品作は人形や幽霊(亡霊?)、紙人間などの姿に、生きる上で味わう悲哀や儂さ、諦観、狂気のようなものを託して描いたものが目立つ。例えば、黒髪に着物をまとった日本人形は、姿こそ美しく整えられているが古い価値

観や家族観という見えない糸に自由を絡め取られる女性の側面を暗示しているかのようである。昭和34年の「女流」というエッセイの中では「女流という言葉はきらいだが、女であるということは、どんなにしても動かしがたい事実であり、少なくとも私は女の悪いところも良いところもかねそなえている完璧な女性であり、そのことが私の全財産だから、本当に女でなければ描けない絵、どうさかだちしようと男性が赤ん坊を産めないように、どう真似しようと男にはかけない作品を描きたい。」との言葉を残している。何かの主義・主張に頑なに囚われるのではなく、女性、そして一人の人間として感覚を研ぎ澄ませながら日常生活を送る中で得た疑問や違和感を丁寧に拾い上げ、作品のテーマとした。2014年4月14日、逝去。(3)



丹羽和子《人・さまざま》1987年

どこがおもしろい?!

今回は、ハイム・スーチンが1919年頃に描いた《農家の娘》に寄せられた感想をご紹介します。

「さいしょは白いふくをきていたかもしれないけれど、色がついてしまったから、こんな色になってしまったんじゃないかと思う。どうしてかという、さぎょうをするからです。こんなにほっぺたが赤いのも、いっしょうけんめいはたらいっているからだだと思います。手が大きいのも同じようにさぎょうをがんばっているからだだと思います。のうかのむすめなのに、むすめらしくありません。おばあさんに見えました。」(心音さん 7歳)

「背景の色の感じが柔らかくて、農場や畑を連想すると思いました。また、手のごつごつしたところが、いかにも手作業をしている姿が浮かんでくるようで、この表現力はすごいと思います。」(？さん 20歳)

「せが高くていいと思った。うしろがみどりじゃなくて、きんいろだったら、ほうさくのようなすがわかんと思う。わたしだったら、そうする。はだの色がいろいろませてあって、生きてる生命力があった。かみの毛をしばってのかなあと思った。こまかいところまでやっていてすごい!!」(ひなこさん 11歳)

「かおは丸いのに体が細いから、はたらいでやせたみたいだと思った。はじめて自分の絵をかいてもらってきんちょうしている感じ。」(ウヘソクさん 8歳)

「初見では『どこが農家の娘なんだ?』と思いました。私はパン屋の娘に思えました。顔がアンパンのヒーローと似てますし。」(笑点さん 23歳)

「人をまっているように見える所です。すきな人をまっているのか、父、母をまっているのか、考えたりするのがおもしろいです。とくに手をひざにのせてまっているのが、本当に大事な人をまっているように見えるのがおもしろいです。」(莉子さん 9歳)

「この絵は目が見えない人が、いろいろなものをさわったり、そうぞうしてかいたと思います。目が見えないと絵がかけないと思っていました。でも、この絵は、目が見えない人がかいているかはわかりませんか?」(朱那さん 8歳)

「色のぬり方がくねくねしていて、おもしろいです。色もおもしろくて、どういう所かという、色と色をかならずまぜているように思えて、いろいろな色を使っていると思います。これからもがんばってください。」(七



ハイム・スーチン《農家の娘》1919年頃

海さん 10歳)

「『この絵、上手?』って言われたらとまどうけど、わたしはこんな絵かけないのですごいと思いました。」(ゆいさん 10歳)

この絵の作者、ハイム・スーチン(1893-1943)は現在のベラルーシ共和国、ミンスク近郊の村スミロヴィッチ生まれ。厳格なユダヤ人の家庭に育ちました。ユダヤ教には「偶像崇拜の禁止」の戒律があるため、スーチンは自由に絵を描くことができませんでした。1913年画家を志してパリに移住しますが、しばらく貧困生活が続きます。内向的な性格のスーチンは孤独にも苦しみますが、同じユダヤ人でイタリアから来たモディリアーニとは非常に親しい間柄になりました。モデルの気取らないポーズ、モデルと調和する色を塗り込めた背景など、スーチンの人物画には、もしかするとモディリアーニの描く人物画に影響されたところが一部あるのかもしれませんが、もっとも、激しい筆致はスーチン独特のもので、モディリアーニの描き方とは大きく異なります。皆さんもご指摘のように、これだけ激しく歪んだ絵でありながら、モデルの特徴や個性がしっかりと見る者に伝わってくるのが、この作品の最大の特長であり魅力ではないでしょうか。《農家の娘》のモデルになったのは、当時南仏のカーニュに住んでいたジャーニニという名前の女性で、彼女の記憶によると当時13歳くらいだったそうです。スーチンはこの頃カーニュに滞在しており、そこで出会ったこの少女にモデルになってほしいと頼んだのかもかもしれません。(nori)

河野 次郎(こうの じろう/1856-1934)

河野次郎は、草土社で活躍した河野通勢(こうの みちせい/1895-1950)の父である。通勢に絵画の手ほどきをしたほか、中村不折を小山正太郎に紹介したことで知られる。

次郎は、1856(安政3)年に足利藩士杉本奥太郎の三男として江戸上屋敷に生まれた。1867(慶応4)年、江戸開城により藩命により足利に帰藩し、1868(明治元)年から同藩士の南画家田崎草雲に南画を学ぶ。1874(明治7)年に上京。高橋由一に洋画を学んだというが、詳細は不明である。1876(明治9)年、河野家へ入籍。同年頃に名古屋に赴き、愛知県師範学校と愛知県中学校の画学教師を兼務した。1877(明治10)年、図画教科書『画学階梯』を出版する。1880(明治13)年、洋画塾を開く。1882年(明治15)年、長野県師範学校松本支校の教員となり、愛知を去る。1886(明治19)年、師範学校の移転に伴い松本から長野に移る。1895(明治28)年、退職し、写真場を開業する。1925(大正14)年、上京。通勢と同居し、1934(昭和9)年に小金井において死去した。

次郎は、明治初年にはじまった学校教育の場において洋画の技法を教授し広めただけでなく、私塾を開いて一般にも広めた。愛知においては洋画受容のはじまりに位置する作家のひとりである。『古今中京画壇』[田部井柳太郎著、1911(明治44)年発行]と同書を基に

した『愛知画家名鑑』[服部徳次郎編著、1997(平成9)年発行]は、この頃の号を「中華」としているが、現存作品に「中華」のものはなく、「華江」が用いられている。教え子に野崎華年(のざき かねん/1862-1936、本名:兼清)があり、明治9年から15年まで学んでいる。『近代日本美術教育の研究 明治時代』、金子一夫著、1992(平成4)年発行。本書には他を含めて教えられるところが多い。

次郎の作品は通勢の個展などにおいてこれまでも展示紹介がなされてきたが、2008(平成20)年から2009(平成21)年にかけて開催された通勢の回顧展において行われた調査によって新たな作品が多数発見された。これらは次郎と縁のある地域の美術館に分担して収蔵されているが、名古屋市美術館においても名古屋時代のものを中心とする一部を平成24年度より受託している。(み。)



河野次郎《[明治九年十月三十日於明善館 華江河野次郎写]》1876年 名古屋市美術館寄託

イベントレビュー

親子で楽しむアートの世界 遠まわりの旅

この展覧会では、アーティストユニットD.D.の作品「昼の目 夜の目」内の闇の空間で様々なパフォーマンスを開催しました。いずれも展覧会のテーマに合わせて、D.D.の作品や他の出品作品から得たインスピレーションを元に制作して頂いたものです。コンテンポラリーダンスや、アートパフォーマンス、そして現代詩や実験的な音楽など分野を超えたアーティストたちが現代アートとコラボレーションしたのです。

武術の身体的な型や動きをダンスに取り入れる小山田魂宮時さんのパフォーマンスは、動きやスピードとともに気迫に溢れる気配を感じさせるものでした。また、不可思議な詩を朗読する村田仁さんの詩のパフォーマンスは、村田さんの透明な声の響きによって、発せられた言葉がいつまでも頭の中に残るようでした。サイレンスダンスのタナカアリフミさんは、クリンガーの《手袋》からインスピレーションを得て、暗闇に手袋が光るパフォーマンスで子どもたちの心を虜にしました。天使と赤ん坊のイメージを入れ替えながら、ユーモラスな動きとともにキュートでいてコケティッシュな魅力を持った三輪亜希子さんのダンスでは、D.D.の今村さんが考案した「舞考」を体現されました。踊りのポーズとしての言語であり思考方

法でもある「舞考」は、実際の身体の動きを基にしていないにもかかわらず、「舞考」の作品からそのまま出てきたような見事なダンスを披露してくださいました。ほかにも、河村みさんは「闇の住人」として赤外線カメラを使い観客とインタラクティブにパフォーマンスし、さらにそれを作品として映像で見せ、実験音響プロジェクトCONTAGIOUS ORGASMのライブは、日常の中のノイズを音楽に取り込んだ実験的な音楽で子どもたちがリズムに乗って体を動かしながら楽しみ、3人組のKino Kugelの光の衣装を身にまとった幻想的なダンスなど、本当にたくさんのお客さんに楽しんで頂いたのではないかと思います。

実は、これらのパフォーマンスを録音した音や小道具などがパフォーマンスが終了するたびに展示に加わっていきました。パフォーマーの息遣いや気配を感じて闇の中で感覚を開いて頂きたいという仕掛けでしたがいかがでしたか。D.D.の作品には他にも感覚を開くための様々な仕掛けがあったのですが、闇の中で私自身はものすごい眠気に襲われたり聴覚が敏感になったりと、少し普段とは違った風に自分の感覚が開くのを感じました。(hina)



三輪亜希子パフォーマンス

イベントガイド

■現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展 ヤゲオ財団コレクションより

世界トップクラスとされるヤゲオ財団(台湾)の現代美術コレクションの中から、常玉(サンユウ)、フランシス・ベーコン、ザオ・ウーキー、アンディ・ウォーホル、杉本博司、蔡國強、ロン・ミュエク、ピーター・ドイグ、マーク・クインなど、代表作ばかりの73点を紹介します。

会期: 9月6日(出)~10月26日(日)

料金: 一般1,200円・高大生800円・小中生無料

■ゴー・ビトゥイーンズ: 子どもを通して見る世界展 写真家ジェイコブ・リースは、英語が不自由な親に代わって通訳などの用事をこなす移民の子どもたちを「ゴー・ビトゥイーンズ(母国とアメリカをつなぐ橋渡し役)」と呼びました。本展では、こどもを、広く私たち大人と世界をつなぐ「ゴー・ビトゥイーンズ(媒介者)」にとらえ、異なる世界を往来するこどもの性質や多様な感覚、彼らの生きる社会の諸相を世界各国の20作家の映像、写真、絵画などの作品を通して紹介します。

会期: 11月8日(出)~12月23日(火・祝)

■常設展

○名品コレクション展Ⅱ(前期)

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

会期: 9月6日(出)~10月26日(日)

エコール・ド・パリ: パスキンの版画から

メキシコ・ルネサンス: こども

現代の美術: 1970年代-80年代の美術

郷土の美術: 浅野弥衛と桜画廊の作家

■コレクション解析学

※2F講堂・無料・先着180名

○第3回

日時: 9月28日(日)午後2時~

演題: 「ノグチの造形思考」

講師: 保崎裕徳(名古屋市美術館学芸員)

作品: イサム・ノグチ《死すべきもの(Mortality)》1959-62年

○第4回

日時: 11月30日(日)午後2時~

演題: 「版画が語るパスキンの像」

講師: 中村暁子(名古屋市美術館学芸員)

作品: ジュール・パスキン《放蕩息子と娘たち》1926年

休館日は月曜(祝休日の場合は翌平日)、9月2日(火)~9月5日(金)、10月28日(火)~11月7日(金)です。詳しくはHP <http://www.art-museum.city.nagoya.jp>をご覧ください。(MI)

展評

2014年5月17日(土)～6月15日(日)
ギャラリー数寄(江南市)

『庄司達展』

布を素材とした彫刻作品を手掛けてきた庄司達(1939年生まれ)の展覧会が開催された。ギャラリーの一階では部屋を横切るように二つの壁を渡る彫刻作品やマケット(模型)、小品が展示されていた。そうした従来の作品や表現とは別に二階に設置された、色鮮やかな赤い布による作品には、これまでの表現とは明らかに別趣ものが感じられた。

《吊られたスカート》と題された作品は、およそ直径6mの一枚の布に155本の糸を内側から刺し、それをギャラリー天井に設置されたネットに結びつけたものである。

糸を刺す位置は、中心から外周にかけてマトリックス状に、また隣り合う地点の距離の増減を図りながら設定される。天井に伸ばされ、布を吊るす糸は、外周に近づくにつれ長くとられ、吊るされた糸の張力、布が垂れる重力によって、ドームの形態と表面の皺(ブリーズ)が現れる。その外観は遊牧民の住まいでもあるパオ(包)を想わせもする。

今回の展示では、観客はその裾をくぐり、およそ3.5mの直径を持つ“スカート”のなかに潜り込むことが出来た。躊躇しながらもその内部に入ると、ギャラリー内のエアコンの送風によって吊るされた糸が揺れ、赤い布を透過する外光が微妙な移ろいを見せる。内部の皺の形状は、外観以上に複雑な様相を呈し、視界はその鮮やかな赤のグラデーションによって覆われ、ある趣サイケデリックな感覚を味わう。オブジェや彫刻としての外観を見せながら、その内

部ではモノや人を包む、布本来の役割や機能を強く思い起こすことになる。

例えば、張った布が醸し出す緊張感や浮遊感といった、布を用いた彫刻に寄せられたこれまでの評価は、言わば外観から受ける印象であって、身体感覚をも喚起させる今回の作品に対しては、さほど有効ではない。

この作品に確認できる、布に包まれる空間と体験の発想とは、近年作家が携わってきた屋内外での茶席の設計に起因し、それを発展させたものである。主客が相対し、茶碗を手



庄司達《吊られたスカート》2014、《同》内部
2014年 赤色布、糸、ネット、カーペット 570×570×295(cm)

渡す距離と空間にまで削ぎ落とされた空間を現出するこの作品は、建築や借景に寄り添う、従来の“ソフト・スカルプチャー”の限界を大きく拡張するものでもある。(J.T.)

展評

2014年4月26日(土)～5月31日(土)
ギャラリーノマル(大阪市)

田中朝子：travel

田中朝子さんは奈良市在住で関西を中心に活躍している美術家です。大学院では版画を専攻されていましたが、梓にとらわれることなく、写真や立体作品も手掛けています。今回の個展では、7.5×9.0cm(紙サイズ)の小さな写真144点を発表、ギャラリーの壁4面に、1点ずつグレーのスリーブに収めてピン留めし、ずらっと横一列に並べました。出品作品は1996年から2014年まで、作家が撮りためてきた写真の中から選ばれています。《ideal cornet》は、作家がコルネと聞いて思い浮かべる「理想形」に合致するものを実際に探し求めて、ドンク生駒店で納得できるものを発見、それを撮影したものだそうです。また、カップ入りプリンを二つにスライスして皿に盛り付けた《プッチン、プリン》には、不意をつく形と質感の可愛らしさがあり、いかにもこの作家らしいユーモアと美意識が発揮されていました。144点もあると、「ツボ」がよくわからない作品もありますが、その場合は素直に作家の感情移入として見ればよいのかもしれない。

田中さんは今回「視線の旅」を意図して「travel」というテーマにしたとのこと。作家は「地図旅行」のごとく、日々の生活の中で様々なものに目を配り、なにげない事物に潜んでいる形状や状況のおかしさを直感して、

そこから喚起されるイメージやストーリーを楽しんでいるようです。作品にはクローズアップや巧みなトリミングにより作家の視線が再現され、事物の意外な様相が露わになっています。あるいは、切る・転がす・ズラす・並べるといった単純な操作が加えられることによって、目の前にあるものが単なる物で無くなり、何かを物語る存在へと変わっています。

非常に即物的な見た目でありながら、いつのまにか観念的な世界に私たちを引き込んでしまう、不思議な力があるのです。田中さんの作品では多くの場合、見せたいもの／状況だけが浮かび上がっていて、余計な情報は一切排除されていますが、その潔さ、形と色の明快さもまた、大きな魅力です。

展示の最後には、直方体の銀色の箱が置いてありました。144点の写真はこの一つの箱に収められて、次の展覧会へ「旅する」のだそうです。次の展示は岡崎市のMasayoshi Suzuki Galleryです(7月12日から8月11日まで)。(nori)



上：《ideal cornet》
中：《プッチン、プリン》
下：《フェイヴァリット》

展評

2014年5月24日(土)～6月23日(月)
masayoshi suzuki gallery

生活 鋤柄ふくみ展

「奥絵」絵に向かうとき、絵の具と筆を手にして画面の奥へもぐっていくのだ、と思うときがある。手さぐりで形に触れながら絵の奥にもぐっていく。手さぐりで絵に触れているとき、私は私の身体にさざわっているようだ、とも思う(※作家のステートメントより抜粋)

絵の中に潜っていくように描かれたという作品たちは、まるで絵の裏の壁が深い洞穴になっていて、絵の世界がその奥に引っ張られていくようで、見ている私もその奥深いところへとどんどん吸い込まれていくような感じがした。奥へ奥へと視点を吸い込まれてしまうのがだんだんと恐くなってきて、その力に負けてはいけなくて視界を絵の外にも広がるように大きく取ろうとすると、絵の中の世界はひとつではなく、幾つかの世界のレイヤーが重なっているように見えた。《美容室N》は、絵の外にある額縁にも描き込まれモノクロの世界のレイヤーとなっていて、時間の層が重ねられているようにも思われた。

一見、異次元や無意識の世界を思わせるようなシュールな世界観を持っているが、彼女の作品は、触覚的な感覚を呼び起こすような物質的なリアルな強さがある。イリュージョ

ンと現実世界とを行き来させながら、私たちの意識の世界の現実感を現前してくれる。

この展覧会では、絵画作品だけではなく、マスクのような立体作品が出品されていて、さらに地下の部屋には大きなインスタレーションが展示されていた。いずれも、彼女の作品世界がやはり層になっていると感じられるものだった。額縁から層になりながら奥へ奥へと空間が広がる大きなオブジェとともにアトリエの中にある物たちが祭壇のように展示されていたインスタレーションは、まるで自身の作品世界の解説のように感じられた。地下に降りていくという順路の効果もあって、まるで作品の核心にある秘密に触れるようなワクワクした気持ちになった。作品の外側と内側を経験したようにも思われ、その世界観にすっかりはまってしまった。(hina)



《美容室N》2013-14年

館長就任のご挨拶



このたび5月1日付けで名古屋美術館長を拝命いたしました。昭和53年に名古屋市に奉職して以来、主に教育委員会での仕事に携わって参りましたので、美術館の活動にはかねてから注目をしており、また一館者としてしばしば訪れておりました。しかし、よもや自分が館長の重責を担うことになると思っておらず、驚きと戸惑い、そして大きな喜びとともに着任させていただきました。

もともと美術に対しては興味があり、近隣の美術館はもとより、旅行などの際にも各地の特色ある美術館を訪問するのを楽しみにしておりましたが、とりわけ現代美術の斬新で自由な表現には心引かれるものがあります。評価の定まった古い時代の作品にも魅力を感じますが、見る者の心と感性を解き放ち、新しい世界へと誘ってくれる現代美術の面白さ

はまた格別です。とは言いましても、もとより美術の専門的な知識があるわけではなく、これからは様々な方々のご指導、ご助言をいただきながら美術館の運営に携わって参りたいと考えております。

名古屋市美術館は昨年開館25周年を迎え、すでに1100万人を超える来館者の方々をお迎えし、当初ゼロからスタートしたコレクションも5500点を超えるまでに充実してまいりました。さらに多彩な展覧会の開催、充実した教育普及事業、学校教育との緊密な連携など、開館以来の成果は着実に積み上げられてきています。一方で日本の経済状況の悪化にともない、美術館を含む様々な文化施設を取り巻く状況は年々厳しさを増しております。

しかし、何事によらず、苦境にある時こそその真価が問われるのではないかと考えます。美術館が本来果たすべき役割とは何か。市民の方々とのような関係を築いていくべきか。美術館設立の基本に立ち返り、これまで積み上げてきた歴史をしっかりと検証した上で、未来への新たな一歩を踏み出していきたいと考えております。多くの市民の方々に愛され、ともに歩んでいく美術館をめざし、職員一同一層努力してまいります。どうぞ今後とも暖かいご支援とご協力をいただきますようお願いいたします。(横井政和 よこいまさかず)

BOOK

『まなざしのエクササイズ

—ポートレート写真を撮影するための批評と実践—

(ロズウェル・アンジェ著、大坂直史訳)
フィルムアート社、2013年2月

風景写真ならば、その景色の彩りや光の移ろい等、正しく“フォトジェニック(写り/映え)”の美しさに感じたりもしますが、ポートレート(肖像)写真となると、余程の美人か、よく知られた歴史上の肖像ならともかく、見知らぬ他人の肖像に対しては、時として鑑賞の仕方に戸惑うこともあります。写されたその表情から、その人物が置かれた立場や環境について想いを馳せるという方法も有効かもしれません。そういう意味では肖像写真に対しては、風景写真よりも「写真を読む」努力が必要となり、そのため絵画の場合と同じく、ポートレートの制作に当たっては、写真家の技術や工夫がその表現の大きな要素となります。

本書では、19世紀のダゲレオタイプから、「決定的瞬間」のアンリ・カルティエ＝ブレッソンやウォーカー・エヴァンス、さらには森村泰昌まで、これまで優れた写真作品を制作・発表してきた60余名の写真家の作品を12の章によって分類し、作品解説とともにその撮影技術についても紹介しています。

本書が優れている点は、その構成にあります。それぞれの章の最後に「課題」と題して、取り上げたテーマについて読者自身が実践、つまり撮影できるように、その手順と注意点が丁寧に「指導」されます。勿論、カメラを持っ

ていなくても、また撮影や制作の経験がなくても、その「課題」によって撮影の手順を辿り、写真家の着眼点と作品が撮影された現場を「追体験」し、より良く理解できるように組まれています。

例えば、「ピンボケ・消えていく被写体」では、撮影時の注意事項として「被写体を前景に配置」しながら、被写体ではなく、「十分に離れた背景に鮮明にピントを合わせること」が「指示」されます。そうした言わば、「描写」されない被写体について、わたしたちは、どこか、あるはずもない「記憶」の映像に想いを巡らせたりします。また、それとは逆に長距離望遠レンズを使った街頭の写真では、写真家と同じく“盗み見る”行為と奇妙な臨場感を味わうことになります。

しばしば誤解されるように、写真が決して偶然に写ったものではなく、作者が意図的、必然的に操作したことに本書は、読者の思考を導きます。

現在、アメリカでは本書の続編が準備されているとのこと。ポートレートの新たなトレンドはもとより、写真の本質で魅力でもある「他者」を見ることについて新たな視点を齎してくれることを期待しましょう。(J.T.)



【編集後記】

アート・ペーパー96号をお届けします。夏到来!美術館では、毎年二回、美術館の南側にある池の清掃を行っています。今年も藻が大繁殖する時期に先がけて、七月初旬に行いました。清掃するに当たっては、まず池の給水を止め、水を抜くことから始まります。その時大変なのが、池に生息する魚の“救出”だそうです。90リットルも入る大きなポリバケツを4つも5つも用意し、一匹一匹、網で掬います。そうして救出できたものは小さなものを含めると100匹を優に超え、なかには30cmにも成長した巨大なフナも居り、用意したバケツはすぐに満杯となります。水を抜いた後は、池の底や岩肌についた苔や藻を除去し、水を入れ替え、しばらくした後に“放生”します。毎年、夏の終わりに、なぜか、新たに多くの金魚が泳いでいるのも確認できます。ただ、秋になるとどこからともなく鯉が飛来、池は恰好の餌場になるようです。「涼を感じる」とまではいきませんが、木曾川の風景を想定したデザインともども、覗いてみてはいかがでしょう。(J.T.)

アートペーパー第96号 発行日：2014年8月1日

発行 名古屋美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間：午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は開館の30分前まで



Nagoya City Art Museum